



農学科一般推薦入学試験を実施しました

11月1日(月)に実施した農学科令和2年度入学一般推薦入学試験は76名が受験し、過去最高の受験者数となりました。

試験当日は、午前中に小論文試験を実施しました。受験生は出題テーマに対して思索を深めながら鉛筆を走らせていました。

続いて、午後に面接試験を実施しましたが、控室で事前に練習してきたことを何度も復習し面接の順番を待つ受験生もいるなど、皆、緊張した面持ちで面接に臨んでいました。

受験生一人一人が最後まで粘り強く試験に取り組んでいる姿を見て、非常に頼もしく感じました。また、試験終了後に、安堵の表情を浮かべながら会場を後にしていく受験生の姿がとても印象的でした。

合格者の発表は、11月13日(水)に実施し、一般推薦入試に先立って実施した農業系高校後継者特別推薦入学試験の合格者6名も含め、合計で67名が合格しました。

本年度の推薦入学受験生の特徴として、農大のオープンキャンパスや緑の学園研修に参加したことがある受験生が93%と、大部分を占めていました。加えて、農業関係高校からの受験生が78%を占めるとともに、農家子弟が31%と、今後の本県の農業を担う多様な人材が集ったと感じました。

また、専攻別では、露地野菜、施設野菜、果樹、作物の各専攻に希望が集まったことも特徴の一つです。

なお、令和2年度一般一次入学試験は、12月10日(火)に実施します。

(学務科 鈴木 聡)



派遣実習が終了しました

農学科1年生の農家派遣実習の終了式を10月18日(金)に行い、冬休みに実習する学生などを除き無事39日間の派遣実習を終えることができました。これもひとえに、受入農家の皆様や農業改良普及課など関係機関の支援と指導の賜物と深く感謝しております。

学生たちは、農家の作業効率やスピード、経営の工夫や考え方、多方面の人脈形成の他、最新の作業機械や情報収集機器などを目の当たりにし、思考から技術まで多くを実地で学ぶことができました。アンケートでは、農大よりはるかに多い作業量や集中力が求められる中、一歩先を読んだ行動やコミュニケーションの重要性が身にしみ、もっと学びたいという意欲がわいた、作業効率を考えるようになった等、自身の変化を成長として感じていました。

受入農家の学生評価は、非常に良くできた51%、良くできた40%と良好で、ほとんどの受入農家は今後も受け入れてもよいとの回答でした。宿泊による受入は畜産を中心に全体の約30%で、多くの学生は自宅や寮から実習に向かうスタイルが主流となりつつあります。一方、非農家や農業高校以外の出身学生は農業経験が少なく、知識、技術、体力が不足が挙げられた他、集中力に欠けるやあいさつをはじめとしたコミュニケーション能力が不足しているとの指摘をいただきました。

このような状況を考慮しつつ、今後も受入農家の方にご協力いただけるよう、また学生にはより実り多き実習となるよう、派遣実習の目的や位置づけを明確にしたいと考えています。

(農学科 中谷 洋)

校外学習

先端的なICTを活用した栽培技術を学ぶ

施設野菜専攻の2年生15名が、10月24日(木)に、校外学習として「JAあいち経済連営農支援センター(以下ASC)」と、豊橋市西赤沢町の、大玉トマト生産農家で、JA豊橋トマト部会の部会長を務める白井俊也氏の圃場を視察しました。

ASCは、①先進技術や応用技術の検証・実用化、②産地課題の解決、③生産技術情報の発信、④安全・安心の提供の4つの役割を担った組織で、平成29年に施設を更新し、新施設に導入されたハウス内環境制御技術を活用して産地課題の解決等に取り組んでいます。

視察では、高軒高ハウス内の環境を制御することによる施設大玉トマトの増収技術やトマト台木を利用したナスの養液栽培技術の開発について説明を受けました。また、稼働式ベッドを利用して面積あたりの作付け株数を増やすことで、イチゴの生産量を増加させる栽培技術の開発現場も視察しました。

学生からは「交配は蜂交配か?」、「西洋マルハナバチを使っているのは何故か?」、「液肥のEC値はどれくらいに調整しているのか?」等、活発な質疑がなされました。



〔営農支援センター長の説明を聴く学生たち〕

続いて、東三河農林水産事務所農業改良普及課の加藤技師の案内で、白井俊也氏のほ場を視察しました。JA豊橋トマト部会

は第47回日本農業賞において農林水産大臣賞(翌年度天皇杯受賞)を受賞した先進産地で、栽培面積約50ha、部会員135名を誇ります。

促成長期栽培と年2作型により、麗旬、りんか409、麗妃、桃太郎ホープ等の品種を栽培しています。出荷物はレギュラーを中心に高食味アイテムとして糖度の高さで幾つかの規格に分けて差別化を図っています。生産性の向上のため高軒高ハウスや環境制御技術を積極的に導入し、オランダの生産技術や考え方を取り入れた結果、出荷量は大幅に向上しています。



〔白井氏のハウスを視察する学生たち〕

白井氏は、栽培面積59aで促成長期栽培を実施しており、ヤシ殻培地による養液栽培で大玉トマトを生産しています。視察した温室は高軒高ハウスで高性能な環境制御システム(プリバ社製)や二酸化炭素を温室内に効率的に行き渡らせるために特注したダクトを設置しているなど、最新の設備が整っていました。

本校でもプロジェクト活動でトマト栽培を重点的に実施しているため、学生たちの関心は高く、「栽培で特に注意していることは何か」、「誘引方法はクリップ止めと紐を巻き付ける方法のどちらが適しているか」等、活発な質疑応答が行われました。

2年生の卒業論文作成もいよいよ佳境にさしかかります。今回の視察を刺激にし、論文の作成に追い込みをかけていきます。

(農学科 榎本 剛士)

農業者生涯教育研修 GAP導入の先進事例を視察

GAPの現地視察研修を11月12日(火)に実施し、10名の参加がありました。

視察先の(株)マーコ(田原市)は、本年3月にトマト、ミニトマト、イチゴでASISGAPを認証取得された法人です。

GAP認証のきっかけは、流通業者から「イチゴを輸出したい」との要望を受けたことで、検討の結果、海外輸出を目標にASISGAP認証を目指したそうです。

(株)マーコの青山代表からは、従業員1人分の労力がGAPに必要なこと、GAP認証の表示ができないため、現状では認証取得のメリット感はないが、今後人口減少で国内市場が縮小していくことから、息子の世代には必要になると感じている等の説明をしていただきました。

その後、出荷調製場、イチゴハウスやトマトハウスを視察させていただき、現場での整理整頓や資材の区分、見える化の表示等、GAP審査の際のポイントに関して具体的な説明をしていただきました。



[青山代表の説明を聴く受講者たち]

青山代表からは、審査員の人数が少ないこと、GAP認証表示できないこと等、GAP認証に関わる問題点や苦労話を率直に語っていただくとともに、多数の質問にも適切に対応していただきました。実践農場で現場を見ながら、直接担当者の生の声を直接聞くことができ、出席者の評価が高い研修となりました。

(担い手支援科 野々山利博)

養牛における臭気問題と スマート畜産の現状・方向性を学ぶ

養牛施設における臭気対策とスマート畜産に関する研修会を、10月30日(水)に半田市酪農組合飼料配合所で行い、県内畜産農家を中心に34名の参加が得られました。

本県の畜産経営は、都市近郊に立地するケースが多く、畜産に起因する苦情について畜産経営者は特に配慮することが求められています。中でも臭気問題に対しては、効果的な対策技術が求められています。

本研修では、臭気対策についての近年の状況について、県農業総合試験場畜産研究部の黒柳主任研究員が講演しました。県内の大半の市町村が臭気指数規制を行っていることや、畜環式においセンサーとGPSデータを活用し、悪臭の発生個所や強度の見える化に関する研究の途中経過が報告されました。今後、見える化された悪臭対策の具体的な方策提示に期待がもたれる内容でした。



[業界事情を含め熱く語られた池口教授]

次に、ロボット、AI、IoTを活用したスマート畜産について、宇都宮大学農学部の池口教授から講演していただきました。畜産部門は、他の農業部門と比較してロボット化・作業の自動化は進んでいますが、スマート畜産を導入するには、まず、自らの経営を確認することが不可欠であると述べられました。また、今後の展開例として、クラウドによって畜舎内の衛生・飼養環

境、作業の自動化、乳牛の行動検知等を制御して、生産性向上と労働時間、コスト低減が期待できる次世代閉鎖型搾乳牛舎についても学びました。

総合討議では、養牛におけるIoT、ロボット導入の有用性についての質問が相次ぎ、当分野に対する関心の高さがうかがえました。

(就農支援科 石本 聖絵)

愛知農業次世代リーダー塾 「トヨタ生産方式」を実践農場で学ぶ

9月に開講した「愛知農業次世代リーダー塾」(全12回)は、講座の中盤を迎え、本県独自の研修内容である「トヨタ生産方式」の講義、実習を、10月29日(火)と11月5日(火)に実施しました。

初日は、「トヨタ生産方式(TPS)」とは、「徹底的なムダの排除による原価低減」が基本思想で、「ジャストインタイム」と「自働化」の2本の柱で成り立っていること等の講義を受け、労働安全、事故防止のための危険予知訓練の演習を行いました。



[4S・見える化の説明を聞く受講生]

2日目は「トヨタ生産方式」の実践農場である新城市の「リイ・ファーム」に出かけ、ムダを排除する4S(整理、整頓、清掃、清潔)の実践による現場改善の事例を見学しました。その後、受講生自らの農場での異常の発見、情報共有、見える化を進

めるための作業(出荷)計画表(ホワイトボード製)の作成に取り組み、できあがった計画表の発表も行いました。

講師からは、計画表は今後も使いやすいよう改善が必要で、「改善には終わりが無い」との指導を受けました。

実践農場で現場を見ながら実習することは、自らの気づきと改善を継続していく意欲の向上にもつながりました。



[作業計画表(ホワイトボード製)作成実習中の受講生]

今後、リーダー塾では、財務管理や労務管理、人材育成法等を学習し、集大成である経営計画の作成に向けて、個別指導を実施し、2月の発表会、修了式を迎えます。

(担い手支援科 野々山利博)

県民公開講座 農福連携研修～基礎から学ぶ野菜栽培～

農福連携とは、農業と福祉が互いに連携して、障害者の農業分野での活躍を通じて自信や生きがいを創出し、社会参画を促す取組です。農業サイドでは、労働力の確保や荒廃農地の解消等の課題解決につながることも期待されています。

近年、就労施設等において、農業分野での障害者就労を目指した訓練や支援に取り組む事例が増えている一方で、農業技術指導を行う福祉施設職員の農業に関する技術や知識が不足している事例も見受けられます。

農大 秋の風景

そこで、栽培技術の基礎を学ぶ農福連携研修を、10月30日(水)に初めて開催し、福祉事業者、関係者24名が参加しました。

講師の加藤國雄氏は、農業改良普及職員のOBであり、豊富な経験と要点を押さえた資料に基づき、野菜栽培の基礎についての講義をしていただきました。

例えば、栽培管理の例として「優良苗を無風時に植えて、かん水はしっかりとやること」、「病虫害の防除では、罹病株や被害株は早く見つけて除去することが大切」、

「同じ種類の品目を続けて作付すると、土壤病害が発生するため土壤消毒が必要になる。同じ仲間の野菜を連作しないように」等の基本事項をわかりやすく説明されました。

講義の後は本校のほ場を見学し、受講者に講義で聞いた栽培管理のポイントなどに関するイメージを持っていただきました。



[加藤講師の講義を熱心に聴講する受講者のみなさん]

また、県農業経営課の杉原主任主査から、農林水産省の農福連携に係る支援内容の紹介や、「JA愛知中央会の農福連携相談窓口」の現状と今後の活動等を説明しました。

参加した受講者からは、「農作業の実体験で感じていたことを体系的に学ぶことができてうれしかった」、「これまでの知識が間違っていたことが分かり勉強になった」、「収穫のタイミングが良く理解できた」等の感想が聞かれ、満足度の高い研修会となりました。

(就農支援科 河野真砂子)

研修部では、新規就農を目指す社会人を対象に、主に露地野菜栽培を中心とした長期研修を開講しています。

10月の台風が接近している中で、作物専攻が収穫した後の田んぼに残った稲わらを研修生が拾い集めていました。聞けば野菜圃場の敷料用のわらとのこと。最近では、コンバインで収穫するため、稲わらは切り刻まれて田んぼに散らばっている様子しか見ていません。「なるほど。自分が子供の頃は、近所の畑には稲わらが敷いてあったな。」と思いながら立ち去りました。



[追進館の横で天日干しされている稲わら]

11月1日、少し早めに出校した時に目にしたのが写真の風景です。形は少々不揃いですが、稲わらたちが次の活躍に備えて天日干しされていました。朝日を浴びた綺麗な黄金色に思わず見とれてしまいました。半世紀近く前に、近所の悪ガキたちと田んぼのわらの山を崩して遊び、農家の親父に怒られたことが、妙に懐かしく思い出されました。

馬頭道を一步中に入ると、タイムスリップしたかのような、ほっこりとした風景が広がっている秋の農大の一コマでした。

(副校長 堤 公生)



農大からのお知らせ

◇農大祭2019を12月7日に開催します◇

「新農大への Step up ～農産物に感謝を込めてから」をテーマに、農大祭2019を、12月7日(土)午前10時から午後2時まで、農大で開催します。

学生・職員一同心を込めて準備に取り組んでいます。ぜひ会場まで足をお運びください。

〈自慢の農畜産物直売〉

鉢物・緑花木専攻：シクラメン、アンズリウム、ポインセチア、シンビジウム、パンジー、コショウラン、ビオラ、葉ボタン、各種観葉植物等

切花専攻：キク、バラ、ストック

作物専攻：コシヒカリ、あいちのかおり、もち米

果樹専攻：晩生ナシ、カキ、シャインマスカット、ジャム

露地野菜専攻：キャベツ、ハクサイ、ニンジン、レタス、ブロッコリー、カリフラワー、サツマイモ、サトイモ、ホウレンソウ、ダイコン

施設野菜専攻：トマト、キュウリ

畜産グループ：牛鶏の堆肥

養豚・養鶏専攻：鶏卵(名古屋コーチン、紅白ミックス、烏骨鶏、アローカナ、ワールドバック、どでか玉子)



【賑わう農産物直売(今年の農大祭)】

〈食品バザー〉

うどん、チョコバナナ、五平餅、からあげ、汁なしラーメン、ホットドッグ、ポテトフライ、フランクフルト、プリン、クッキー、ギンナン、つけもの、おしるこ、ミルクティー、コーヒー、タピオカドリンク、ココア

〈催し物〉

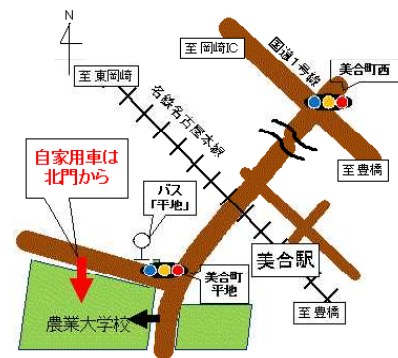
- ・後援会提供の農産物等販売
- ・茶道部による農大茶席
- ・農大キャンパスツアー
- ・環境クラフト教室
- ・協賛団体・企業による展示・販売

〈御来場の方へ〉

公共交通機関では、名鉄名古屋本線美合駅下車徒歩約10分です。

なお、車の入口は北門からになります。車でお越しの方は、正門からは進入できませんので御注意ください。駐車場係の指示に従って御入場ください。

当日は、できる限り公共交通機関を御利用くださるようお願いいたします。



〈詳しくはホームページを御覧ください〉

詳しい内容や案内図などがインターネットで御覧いただけます。愛知県立農業大学のホームページ「新着情報」に「農大祭2019ご案内」として掲載していますので、御参照ください。

- ・問合せ先：学務科(伊藤) 0564-51-1602

◇緑の学園（1日農業体験学習）◇

- ・開催日時
第5回 12月24日(火)
午前10時から午後4時30分まで
(雨天実施)
- ・対象：主に高校生（農業を学びたい高校卒業生を含む）
- ・定員：30名
- ・場所：農業大学校
- ・受講申込書を郵送またはファクシミリで研修部まで送付してください。
(締切日：12月1日(日))
- ・詳細は本校ホームページをご覧ください。
- ・問合せ先：就農支援科(野村)
0564-51-1034

◇令和2年度入学者選抜試験◇

一般入学一次試験

- ・出願期間：令和元年11月12日(火)から
令和元年11月27日(水)まで
- ・試験日：令和元年12月10日(火)
- ・合格発表：令和元年12月19日(木)
- ・試験科目：数学Ⅰ、小論文(800字以内)
面接試験
- ・募集人員：定員100名のうち推薦入学合格者を除く人数
- ・受験会場：農業大学校

一般入学二次試験

12月10日(火)に実施する一般入学一次試験で合格者が定員に満たなかった場合に実施します。

詳細については、一般一次試験の合格発表日(12月19日(木))以降に、本校ホームページをご覧ください。

- ・問合せ先：学務科(鈴木)0564-51-1602

◇生産物実習販売ごよみ◇

令和元年12月の生産物実習販売についてお知らせします。

- ・販売日：12月4日、11日、18日、25日
(祝日を除く毎週水曜日です。)
- ・時間：午後3時から
- ・場所：農業大学校第2機械庫前
※なお、袋入り堆肥の販売は、牛ふん堆肥と鶏糞堆肥に限ります。
- ・問合せ先：農学科(山本)0564-51-1673

校内でCSF(豚コレラ)防疫対策実施中

農大では、CSF防疫対策を以下のとおり実施中です。来校される皆様の御理解と御協力をお願いします。

- 畜舎のある衛生管理区域への関係者以外の立入禁止
- 農大内の主要な通行ポイントに消毒用の消石灰を散布
- 主要な教育施設の各出入口付近全てに踏込消毒槽を設置(靴の消毒)
- 関係車両等の消毒の徹底
(車両消毒槽、動力噴霧器)
- その他、諸防疫対策を実施

